UMEMOTO MEMORIAL DENTAL SERVICE GROUP

SINCE 1950

梅本記念歯科奉仕団

ハンセン病とは

かつて「らい病」と呼ばれた病気で「不治の病」、

あるいは「遺伝する病気」として不当な差別を受けた歴史を持つ病気である。

結核菌によく似た「らい菌」による感染症で、

現在では「DDS」や「リファンピシン」、その他の抗生物質による治療が可能になっている。

しかし根強い偏見のため社会的差別を受けている患者が

まだ世界中に約1000万人いるといわれている。

（写真提供　高松宮記念ハンセン病資料館）

エダ・ハンナ・ライト

テスト・ウィード

ハンナ・リデル

救済の系譜

コンウオール・リー

ジャン・マリー・コール

日本におけるハンセン病救済活動は明治以降ほとんどがキリスト教の神父、宣教師、牧師などによって行われた。1889年（明治22年）フランス人カトリックのテスト・ウィード神父（1849～1891）による神山復生病院（静岡）、1894年（明治27年）好善社の祖アメリカ人プロテスタントのK.T.M.　ヤングマン女史による慰廃社、英国より34歳で来日し1895年（明治28年）熊本で回春病院を開設したイギリス聖公会のハンナ・リデル宣教師（1855～1932）、女史の死後事業を受け継ぎ日本に骨を埋めた姪のエダ・ハンナ・ライト伝道師（1870～1950）、1898年（明治31年）熊本に待労院を開設したフランス人カトリックのジャン・マリー・コール神父（1850～1911）、1916年（大正5年）草津に聖バルナバホームの建設をはたした英国伝道協会の伝道師コンウオール・リー女史（1857～1941）などの海外からの先駆者が挙げられる。

このようにわが国におけるハンセン病救済は海外からの人々の援助により、その礎が築かれ徐々に日本人の篤志家や、キリスト教徒、皇族に受け継がれていき最後に国が動き出し、現在に至っている。これらの歴史的事実をふまえ我々の活動もこのような海外からの奉仕者の献身的活動を範として、アジアの開発途上諸国への救済活動に従事していきたい。

理事長挨拶

梅本　俊夫

梅本記念歯科奉仕団理事長
神奈川歯科大学 口腔細菌学教室教授

私どもの奉仕団が、平成12年（2000年）に創立50周年を迎えることが出来ましたのは、ひとえにご支援頂きました協賛会員の皆様方、内外の関係各機関の方々、並びに会員の皆様方の御尽力の賜物と深く感謝いたしております。

私たちのハンセン病支援活動は、昭和25年に大阪歯科大学の学生クラブ活動として始まりました。当初は、日本国内の療養所への慰問活動でしたが、昭和35年から歯科診療活動を開始し、昭和38年までは国内、昭和39年から昭和42年までは台湾、昭和43年から現在まで大韓民国、昭和56年から昭和60年まではフィリピンで活動を行い、現在は昭和62年から始めたタイ、平成9年から始めたベトナム、及び平成13年から始めたラオスで巡回歯科診療を行っています。平成3年度からは外務省やJICA（国際協力事業団）の支援を受けつつ活動を続けています。

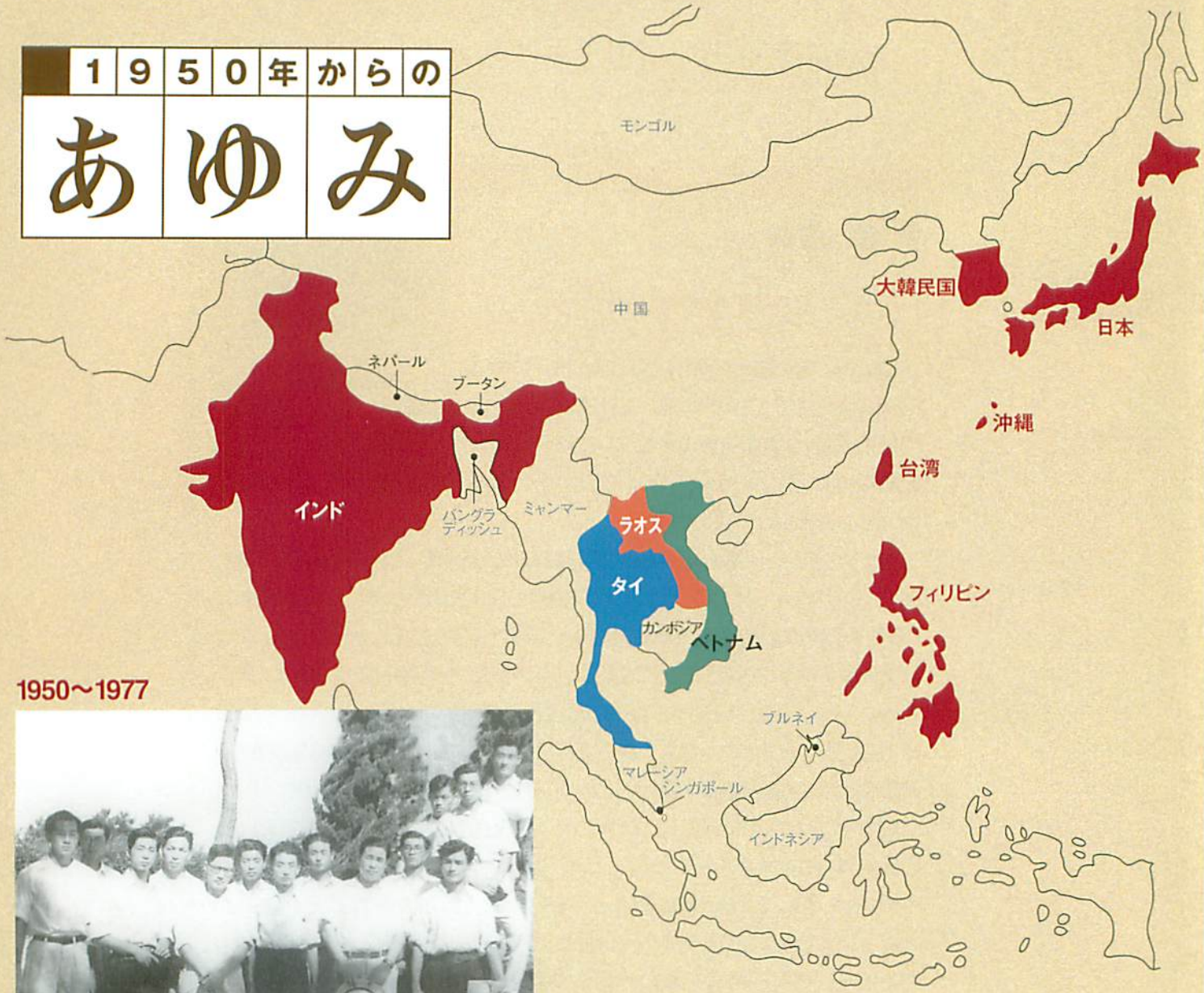
世界中にはアジアとアフリカを中心として、現在でも約1000万人のハンセン病患者がいると推定されています。日本でも明治時代には約10万人の患者がいましたが、現在では病原菌が検出されなくなった人達が大多数で、それも5000人以下にまで減少しています。その原因は、薬の進歩と感染防止の徹底にありますが、その礎は明治の初期に外国人宣教師である、テスト・ウィード神父やハンナ・リデル女史により、神山復生病院や回春病院などの療養所が開設されたことにあります。すなわち日本のハンセン病の減少には、外国人の社会的奉仕に負うところ大きかったと言えます。現在、経済大国となった日本が、国際的に社会奉仕をおこなうのは当然であると言えましょう。

私たちは、今後も医療人としての自覚を持って活動を続けていくつもりですが、この度の小冊子の発行にあたり、これまで支援してくださった方々に、感謝申し上げますと共に、変わりない御支援をお願いする次第であります。

目次

ハンセン病とは ―― P2
理事長挨拶 ―― P3
1950年からのあゆみ ―― P4
町医者たちのNGO ―― P6
奉仕団創設者略歴・団受賞歴 ―― P14
公益信託梅本記念アジア歯科基金ごあんない ―― P15

1950年からの あゆみ



1950～1977

日本国内

国立療養所	長島愛生園（岡山県）	国立療養所	栗生楽泉園（群馬県）
国立療養所	邑久光明園（岡山県）	国立療養所	多摩全生園（東京都）
国立療養所	大島青松園（香川県）	国立療養所	星塚敬愛園（鹿児島県）
国立療養所	松丘保養園（青森県）	国立療養所	奄美和光園（鹿児島県）
国立療養所	東北新生園（宮城県）	国立療養所	駿河療養所（静岡県）

1960～1968

沖縄

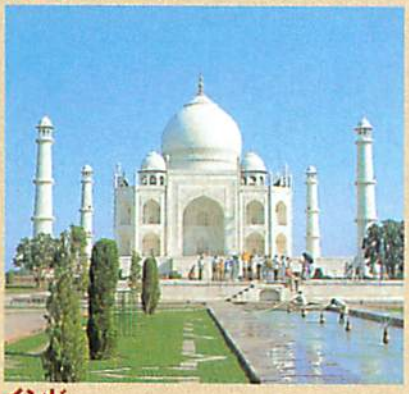
国立療養所　沖縄愛楽園（沖縄県）
国立療養所　宮古南静園（沖縄県）

1964～1971

台湾

省立　楽生療養所
省立　楽山療養所
台湾特別皮膚科診療所

1967



インド
インド救ライセンター

1968〜

大韓民国
国立　小鹿（ソーロク）島病院他
　　韓国内21ヶ所の定着村

1977〜1986

フィリピン
国立　ホセ・ロドリゲス・メモリアル・ホスピタル（セントラル・ルソン・サナトリアム）

1987〜

タイ
国立　ノンサンブーン・コロニー
国立　メラオ・コロニー
国立　パパダイ・ホスピタル
国立　バンハン・コロニー
国立　セラブーン・コロニー
国立　アムナチャラ・コロニー
国立　プラサート・コロニー

1996〜

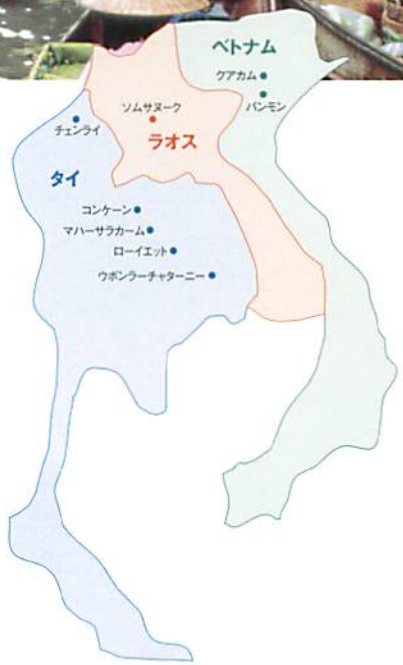
ベトナム
国立　バンモン・レプロシー・トリートメント・センター
国立　クワカム・レプロシー・トリートメント・センター
国立　フーピン・レプロシー・トリートメント・センター
国立　シャンマイ・レプロシー・トリートメント・センター

2001〜

ラオス
国立　ソムサヌーク・セツルメント

町医者たちのNGO

非政府民間援助団体



眼下には紺碧の空、真綿の様に純白な雲のじゅうたんの上を滑るようにCX751便は一路タイのドン・ムアン国際空港へ向けて順調な飛行を続けていました。機内は、この黄金週間に東南アジア各地でのバカンスを満喫しようと若い男女や女同士、男同士のグループで満席です。その中に初老から中年の男ばかりの7～8人の歯科医師のグループがありました。神奈川、京都、大阪、和歌山、岡山、山口と日本各地から乗り合わせた、ノー・ガイディッド・オプショナルツアー(これも略してN・G・O＝ツアコンのいないオプショナルツアー)の参加者です。

このツアーの行先はタイで最も貧しい地域といわれている東北部、タンサルン湖の湖畔コーンケーン市(強い木の意)でした。その目的はこの東北随一の交通の要衝を中心に周囲200キロの地域にあるマハーサラカーム、ローイエット、ラオスまで100キロもないウボンラーチャターニーへの巡回診療とのこと、5月といえどもそこはタイ、昼間の気温は42度の酷暑です。

でもどうして歯科医師がタイの辺境の地、それもレプロセリアム(ハンセン病療養所)などに行くのでしょうか？そしてまた誰がこの様なユニークなツアーを企画したのでしょうか？

救ライ奉仕活動の産声

実はこれを企画したのは、今は亡き大阪歯科大学名誉教授(初代岐阜歯科大学学長)梅本芳夫博士と故舳松克彦先生(大阪歯科大学専門32回生)でした。

博士は若き日、当時の東京帝国大学伝染病研究所(現医科学研究所)での細菌学講習会に参加された時、多摩の全生園を訪問され、ハンセン病(ライ菌による感染症)を病んだ幼い少女が家族から隔離され、一人薄暗い部屋でオルガンを弾いているうしろ姿をごらんになり、何か歯科医師として、いや人間として、この人達の力になれることをしなければならないと思われたようです。

昔はライ病は遺伝性の疾患と思われていました。

それは古くは聖書の中にもヘブル語でツアーラハト(誤訳により今でいうハンセン病ではない)として登場しました。かつてはチャールトン・ヘストン主演の『ベンハー』や、故松本清張氏の秀作『砂の器』などの映画にも登場したように家系によって現れる病として考えられてきたのでした。

これは、ライ菌の持つ性状からきたものでした。繁殖力は弱く、現在なお純粋培養すら出来ない細菌でありながら、一度体の中でその居場所をみつけると、ゆっくりと、永い年月をかけて増殖し、発病してしまうのです。その期間は10～20年の期間で起こるため、いつ、誰から感染したのか分からず、まるで「遺伝」というのにピッタリな時間経過をたどって発病してしまいます。

発病した状態は今のエイズどころではありません。鼻は崩れ落ち、眼球は真赤になって飛び出します、いたるところから膿が流れだし異臭を放ちます。

誰も近づけないし、近づこうともしません。まさに現代のエイズ以上です。

ハンセン病に対する一般社会の対応がこのような時期に、昭和25年梅本芳夫教授は学生の細菌学の講義の中で抗酸性菌について話され、ライ菌に関しても詳しくその細菌学的特徴を講義されました。その講義の中で先の多摩全生園でのことを話され、学生たちに協力を訴えられました。それにこたえ、当時は、まだ学生であった舳松は、日本各地の弧島や僻地に隔離されていた患者さんのために学生だけの演芸慰問団による奉仕を思いつきました。

この年、歯科大学の学生による日本で最初の救ライ奉仕活動がその産声をあげたのでした。

街頭募金から基金創立へ

この学生達だけの演芸慰問奉仕活動は、ハンセン病（ライ菌による感染症）患者の人達に大変喜ばれました。これに気を良くした学生達は自主的にその奉仕活動に情熱を傾けていきましたが、その活動の障害になったのは社会の人びとの偏見と活動資金の不足でした。

この二つの悩みを解決するため街頭募金活動を始め昭和46年頃まで後輩達に引き継がれていきました。

啓豪と言う意味での街頭活動は徐々にその成果を上げたものの、募金活動としては、大した成果が上がらなかった為「救ライ募金公演」と銘打ったチャリティーコンサートを企画しました。その出演者も昭和25年の第1回から昭和55年の45回まで30年にわたってその時代の各界の超一流の芸術家や舞台俳優・歌手の人達でした。

この様な歯科医師だけの救ライ活動に興味と理解を示された当時の皇太子殿下、同妃殿下を始め皇室関係者は我々の東京でのチャリティーコンサートに毎回ご臨席下さるようになりました。

これら30年余りにわたるコンサートの収益は、外務省管轄の公益信託「アジア・コミュニティー・トラスト」内の梅本記念救ライ募金（現在の梅本記念アジア歯科基金）の設立に用いられました。

歯科診療奉仕活動へ

数回の演芸慰問を重ねたころ、当時1400人の患者が療養していた岡山の長島愛生園の光田健輔園長や患者総代の方から「君達が来た時だけでもよいから歯科診療をしてほしい!!」との強い要望を受けました。当時は全国13の国立療養所ですら歯科医官が一人もいない状態でした。強い要請にこたえて、さっそく翌年に2週間余りをかけて全患者の口腔診査を完了しました。

口腔診査の結果は惨々たるものでした。患者の口腔内には多数のカリエスと歯周疾患とそれによる歯牙の早期喪失がみられました。そんな状態を知った学生達は、自分達がとるべき行動と何をしなければならないかが明確に理解できたのでした。

さっそく自分達の出来る範囲で治療器具や材料、薬品の調達に走り回りました。

こうして持ち寄った器具や知識を携え、第1回ハンセン病患者に対する国内で初めての、診療奉仕活動が岡山県邑久郡長島愛生園で行われました。

この話が他の園に伝わったのでしょう、瀬戸内海にある他のライ療養所から次々と歯科診療奉仕の要請があり、多くの学生達が休みを利用してその活動に参加していきました。

国内各地の療養所での約10年にわたる診療奉仕活動に実績を積み重ねてきた学生や歯科医師達は、昭和35年当時はまだ米国の占領統治下に置かれていた沖縄に目を向け、毎日新聞社会事業団と共同主催することにより、第1回の海外派遣救ライ歯科診療奉仕団を歯科医師

7人、学生6人、計13人の団員を沖縄愛楽園へ送り出すことができました。

この団員や器材の輸送には「命の保障は一切しない」との契約のもと、日系2世タカバヤシ大尉の添乗で在日米軍のC54大型輸送機で運んでいただき、この時の梱包法、輸送、通関、食料調達、対外交官との接触法などが、その後の台湾、韓国、フィリピン、タイ、ベトナム、ラオスへと発展していく海外診療の礎を築いていったのでした。

1960年（昭和35）から始めた占領下の沖縄での第1次海外救ライ歯科診療奉仕活動は途中2～3年の中断はあったものの、1968年（昭和43）まで続けられ診療実人数は約1600人以上に達しました。

海外診療活動の始まり

そのころ梅本芳夫教授は、各地のライオンズクラブ(以下LC)やロータリークラブなどで救ライ活動とハンセン病に対する啓豪のための講演を精力的に行っていました。

あるLCでの講演会で教授の講演を聴かれた聴衆の中に故川崎誠蔵先生(東京歯科大学出身)がおられ、歯科医師と歯科大学の学生による社会奉仕活動に大変感銘を受け関心を示されました。

ご自分の所属する茨木LCが台北市北区第7LCと姉妹関係にあったことから、台北の親しいメンバーの一人である黄啓森医師にこの話をされたところ、ぜひ中華民国に来て頂きたい、この奉仕活動はまさしくライオンズ精神の原点"We serve"であり、全面的にサポートしたいとの申し出がありました。1964年(昭和39)年、本当の意味での海外診療が歯科医師13人、学生10人で台湾の楽生療養院で行われました。

1971年梅本芳夫博士が岐阜歯科大学(現在の朝日大学歯学部)初代学長に就任され岐阜にも社会奉仕部救ライ奉仕団が出来、この第4次台湾派遣に初めて岐阜歯科大学一期生の学生が3人参加しました。

1968(昭和43)年、日本と韓国の国交が回復してわずか3年しかたっていない韓国で国際親善の意味も含めて救ライ奉仕活動をやってみてはという話が持ち上がりました。団員の舳松克彦先生が毎日新聞大阪社会事業団と本団とでこの話をまとめ、米第5空軍の協力も得て東京・立川から韓国の金浦空港を経由して光州へ人員と物資を空輸して頂きました。

光州からはバスで約6時間、早朝日本をたったにもかかわらず目的地の韓国最大の国立ライ療養所である小鹿(ソーロク)島(済州島と韓国本土との間の東シナ海に浮かぶ弧島)の国立小鹿島病院に着いたのは真夜中の2時頃でした。

さっそく明朝から診療開始、島内の宿舎と診療所までは木炭車を使って40分、まず梱包を開け設営、患者さんには番号札を首からかけてもらい、壁には「壁カルテ」と名付けられた作業工程進行表を張り付けました。診療の内容は外科と補綴に分かれ、外科はほとんどが抜歯処置、補綴は義歯の作製でした。

学生達は先生方の助手です。外科では懐中電燈を口腔内に照らしたり、外科器具の消毒と準備、補綴に行けば印象材の練和、印象採得後のトレーを技工室へ持って行って石膏流しと休む暇もありません。奉仕活動を目の当たりにした韓国のハンセン病患者や回りの関係者は、当時半信半疑で接していたものの、診療が進むにつれて日本の救ライ奉仕団に対する理解と信頼が増し韓国内のラジオ・TV・新聞などで私達の活動が報道されました。その中で我々が最も感動した称賛のメッセージは「この診療は100人の日本人の外交官の仕事にも勝る」という一行でした。

コロンボ計画が生んだ韓国救ライ奉仕会

第2次世界大戦の戦後賠償であるコロンボ計画の一環として、1969年(昭和44)4月に、第2回の政府受け入れ留学生がタイ、インドネシア、パキスタン、フィリピン、ボリビア、中華民国、韓国から大阪歯科大学にやって来ました。7カ国の政府機関より派遣された優秀な8人の歯科医師達であり、それぞれ希望する専門分野について1年間の研修を受けることになっていた。大阪歯科大学側では受け入れのための担当教授を梅本芳夫教授として、彼ら8人を1年間にわたり公私共に世話することになりました。

その中に韓国からやって来た劉東洙(ユー・トンスー前ソウル大学歯科大学放射線科教室教授、当時37歳)がおられました。梅本教授は前年に行った初の韓国における救ライ奉仕活動での苦労話や、ライ菌の細菌学的な性状なども含め自分が20年にわたって行ってきた奉仕活動の話をいっきに語りかけたのでした。ハンセン病という言葉にも驚いたが、それ以上に韓国人である自分ですら知らない東シナ海の孤島にある療養所に日本から多くの歯科医師や学生が韓国のハンセン患者の歯科医療のためにやって来ていたことに深い感銘を受け、さっそくソウルに

手紙を書いて当時インターンであった明魯哲（ミョン・ノチュル）先生に歯科医師と学生を集めるように指示しました。

その結果7月17日～8月2日までの第2次韓国救ライ歯科奉仕活動に、ソウル大学からも歯科医師2人と学生4人が初参加することになりました。劉助教授も夏休み中であったため、急遽、韓国に一時帰国して参加することになりました。

この日韓合同の奉仕活動が契機になり、日本での研修を終え帰国した劉先生はさっそく大学内にソウル大学歯科大学救ライ奉仕会を創設し、以後25年の間この活動は継続されています。

ハンセン病を通じて結ばれた日韓の師弟関係は1982年大きく花開き「社団法人韓国救ライ奉仕会」の設立となった。これはNGOの真髄である「人」の育成を重視したもので単なる物品の援助のみを先行させたものではない良いケースであった。

フィリピンでの苦難

第3の海外診療の地を比国（フィリピン）とし1977年、その一歩を踏み出した。2～3年前から舳松克彦先生により事前調査が行われ診療地の選定、患者の口腔検診などは終わっていました。そこはマニラから約2時間ケソン市の郊外にあり、比国最大のハンセン病サナトリウムであるセントラル・ルソン・サナトリウム（現ホセ・ロドリゲス・メモリアル・ホスピタル）である。フィリピンでは隔離政策をとっていないため開放的で広大な敷地の中で患者が家族と一緒に暮らしていました。

スペイン皇太子フェリペにちなんで命名された国名、その血も陽気で根っから明るい、物事を依頼するとすぐに引き受けてくれるが、なかなかやってくれない。日本や韓国、中国などの東アジアの国での価値観や常識は通用しない。いざ仕事を始めるとなかなか歯車が合わない。韓国で良い結果の得られたNGOをフィリピンでもとの願いから、現地在住の日本人通訳トシコ・ホンダとミドリ・アキノ女史にも協力を依頼し、各歯科大学や歯科医師会を駆け回り活動への協力と理解を求めたが良い結果は得られませんでした。

その上事前調査を含めて約10年間のフィリピンでの活動中、この奉仕活動の2本の柱であった舳松克彦先生と梅本芳夫教授をつぎつぎと亡くし奉仕団そのものも存続の危機にさらされました。

マルコス政権の終焉と共にフィリピンを撤退せざる得なくなった我々は、厚生省より出向していた在比日本領事館の医師の言葉がすごく心に引っ掛かっていた。

「フィリピンでよい成果をあげられなければ、これ以上南へいってもだめでしょう。」

今まで30年以上も続けてきた救ライ奉仕活動自体が時代のニーズにそぐわなくなったのであろうか、などと考え始めるともうこれ以上南下するのは無理かもしれない・・・。そんな中、新たな候補地をさがすため各方面への問い合わせや政府筋への打診の結果、理事会でタイへの事前調査が決定されました。

新天地タイでの活動

現在タイでのハンセン病患者数は、約20,000人と発表されており、タイ全土にハンセン病医療施設が点在している。患者とその家族は離散することなく、医療施設内やその周辺に家を構えて、一緒に暮らしている。

THAILAND (1987~2001)

タイへの寄贈品と寄付金額の配分

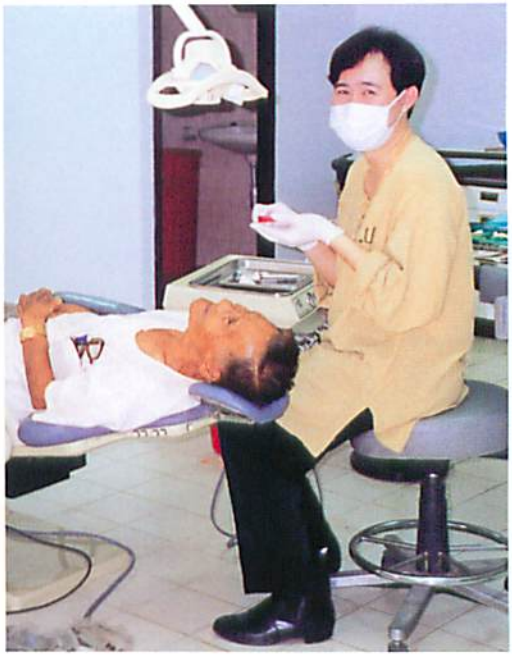
(別表1)

	1987	1988 ~	~ 2000	2001	Total
Vehicle				4,800,000	21,105,340
Construction & Repair				464,742	6,770,345
Dental Equipment & Material	1,569,200	1,075,680	1,013,859	656,564 6,574,230	23,754,768 6,574,230
Payroll of staffs			377,352	432,396	4,088,956
Inviting of training			1,063,440		1,063,440
Drugs			144,249	131,450	1,851,889
Total					¥65,208,968

タイでの交渉窓口は、タイ保健省の中にあるCDC(Communicable Disease Control：伝染病予防局)である。CDCは伝染病に関する多くの課より構成され、当時のライ予防課の課長はパラチョンポン女史であり、実務は事務官のサチアン氏であった。彼はタイにおけるライ予防・治療プログラムを任せられ、対外的な窓口にもなっていた。どの国の官庁でも、課長というポジションは4～5年で交代するため、われわれは継続的な交渉窓口を彼と定め、日本側の活動方針や考え方を説いてきた。

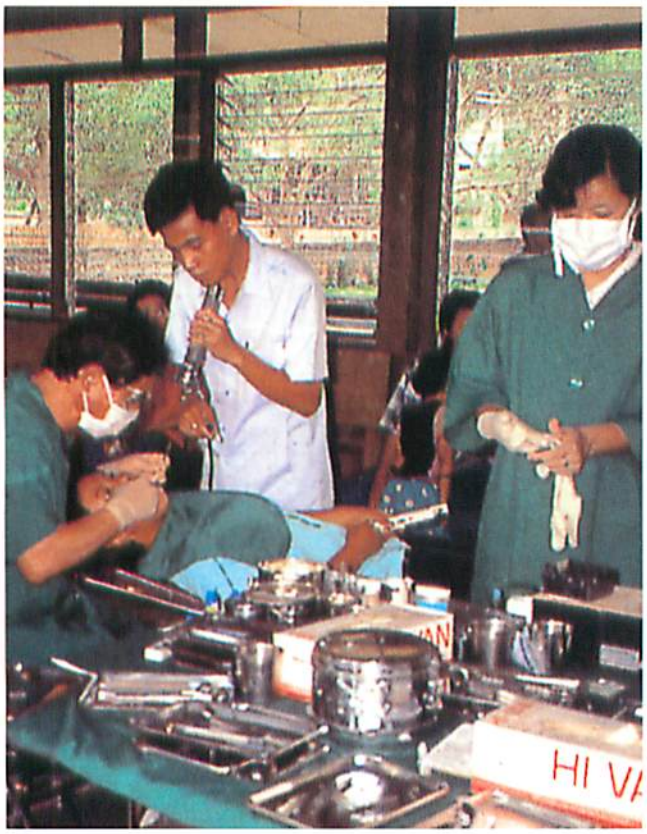
その後、CDC側よりタイ最大のハンセン病医療施設のある東北部に行って欲しいという要望があった。この地域はタイ内で、最も貧しいとされる地域で、人々は農業と出稼ぎで生計を立てている。協議の結果、その東北部要衝の都市コンケン市に拠点を置き、ここから300～400km周辺の、バンハン、セラプーン、アムナチャラの各療養所に巡回診療を繰り返し行うことになった。巡回診療にとって、最も必要な車両は、他の地域のチェンライ、パパダイ、スリンを含めて7台寄贈し活動を維持してきている。

この活動には、現地スタッフや、日本の好善社から派遣されている阿部春代ナースに、通訳として協力して頂き、口腔衛生指導や外科処置、保存処置等を中心に、多大な成果を上げている。現地の



歯科医師達も、われわれの活動が展開するのに従い、協力を申し出るようになった。そこで、協力医のための研修センターでもあり、歯科診療所としての機能を兼ね備えた「梅本記念歯科診療所」を1994年に建設した。タイにおける奉仕活動は、1987年より15年間継続しており、多額の資金や資材、車両、診療機材等が（別表1参照）が寄贈されている。そして、2000年に、この活動に必要な人材育成のため、ノンサンブーン療養所に勤務する、Dr.Suwitを神奈川歯科大学に招聘し、研修終了後コンケン市の歯科診療所で、現地スタッフのリーダーとしてハンセン病患者の歯科治療に従事してもらっている。

15年間の事業継続のおかげで、むし歯や歯槽膿漏をもつ患者数は減少し、代わって多くの患者や家族より、義歯の作製の要望が高まり、2001年在タイ日本大使館の協力を得て、義歯作製のプログラムがスタートした。これに伴い、タイでの義歯作製をより高度なものにすべく、2002年にノンサンブーン療養所に勤務する、歯科看護師のMr.Komkristを大阪歯科大学附属技工士学校に、研修留学のため招聘し、歯科技工技術の移転を図っている。



社会主義国における初の活動

ベトナム戦争が終結して21年、ファンキエン湖にそよぐ風は穏やかで、清々しさを感じた。タイでかなりの手応えを得ることができた我々は、初めての社会主義国でのハンセン病患者の歯科治療プロジェクトを進めていた。アメリカは、ベトナムとの関係改善を図ろうとし、ベトナムではドイモイ(刷新)政策の光が見えかけ、人々の心にも少しのゆとりと豊かさが感じられていた頃である。

笹川記念保健協力財団の協力の下、1996年ベトナムとの交渉窓口を、National Institute of Dermato Venereology (NIDV)のファン・バン・ヒエン先生とし、2回の現地調査を行ったが、なかなか日本側の意向が伝わらなかった。「健康な国民でさえ、また十分な歯科治療を受けられないのに、どうしてハンセン病患者を優先するのか？」といった疑問である。

しかし、ル・キン・ヅエ先生の登場によって、交渉が前進し始めたのである。彼はハンセン病患者の父と称えられ、抗仏戦、ベトナム戦争の生え抜きの戦士であり、有名な詩人でもあった。臨床に於いては、常にハンセン病患者の苦しみや、悩みを聞きその解決に努力を惜しまない医師でもあった。

その結果、1997年バクニン地区Qua Cam Leprosy CenterのDr.Vinhとタイビン地区Van Mon Leprosy CenterのDr.Thoaの協力のもと、予防活動や医療技術指導、歯科医療機材等の寄贈に重点を置いた活動が開始された。この活動を知った大阪帝陵ライオンズクラブより、1999年11月Van Mon Leprosy Centerに歯科診療ユニット(250万円相当)が寄贈された。

2001年より新たにPhu Binh及びXuan Mai両療養所が対象に加えられ、いずれにも現在歯科医師の配属、医療施設もなく、主に抜歯を中心にした外科処置や予防活動を行っている。しかし、歯科医療の供給体制の不十分な国では、本事業が歯科受診の唯一の機会であり、さらなる事業拡大の必要性があると考えている。

VIET NAM (1997～2001)

ベトナムへの寄贈品と寄付金額の配分

	1997	1998	1999	2000	2001	Total
Dental Equipment & Material	1,522,378	1,484,539	636,743	1,232,438	789,151	5,665,249
Dental chair			2,542,520			2,542,520
Drugs	49,229	91,392	83,384	196,245	181,073	601,323
Total	1,571,607	1,575,931	3,262,647	1,428,683	970,224	¥8,809,092

創立50周年を迎えて

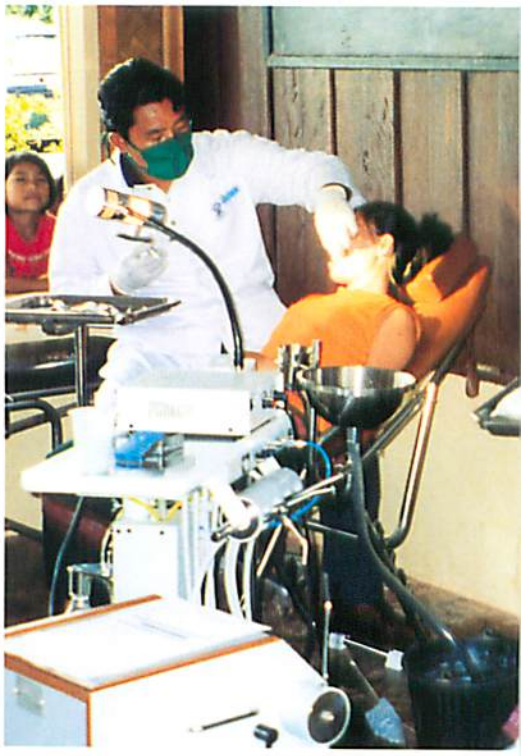
救ライ奉仕団が創立され、2000年で50周年を迎えることになった。1996年「らい予防法の廃止に関する法律」の公布もあり団の名称を変更することになった、梅本記念歯科奉仕団(Umemoto Memorial Dental Service Group)とし名称から救ライの文字が取り除かれたのである。そして2001年5月熊本地裁の「らい予防法違憲訴訟」の判決に対して国が控訴しないとし判決が確定した。これで日本のハンセン病患者は名実ともに名誉の回復と保障がなされたことになった。日本での患者数も4600人(平成12年5月現在)をわるようになった現在患者の平均年令も74才となり新患の発生も1桁にとどまりていることを考えると、あと20～30年で日本のハンセン病患者はいなくなるであろう。

我々の活動も戦後25年が過ぎ国内のハンセン病療養所の医療環境が整ってきた頃、より恵まれない医療環境のアジアに目を向けるようになった。日本と異なり開放政策をとっている国が多かったため患者はもちろんのこと、その家族や病院の職員も治療を希望するようになりその要望にも応えていかなくてはならなかった。創立以来50年の中で医療を取り巻く環境やハンセン病に対する理解も進み当初の活動の主旨も少しずつ変遷を遂げてきている。これからどのように進んでいくかは交渉国あってのことである。今までの経験を活かし手探りで進めていくほかない。アジア諸国のハンセン病患者数はまだまだ400万人以上といわれているその多くを抱えるインドへの道はさらに険しい。

ラオスへ

ラオス人民民主共和国、人口520万人。中国、ミャンマー、タイ、カンボジア、ベトナムの5カ国と国境を接し、海のない内陸国。国名はラオ族のラオを複数形にしてラオスと呼ばれている。ベトナムでの、社会主義国との折衝の難しさを経験した我々は、ベトナムの隣国であるラオスでのハンセン病の現状も調査するべきであるとの結論に達し、2000年3月よりラオスの事前調査に乗り出した。当時の日本大使は宮本吉範氏(2002年3月に退職された。)で、宮本大使御夫妻を始め、関係者御一同のご尽力でハンセン病患者の情報収集や医療施設の視察はことのほかスムースに運び、ラオスの窓口をDermato Leprology CenterのDr.KhieneJayawongとすることが出来た。2000年11月にはJICAの小規模開発パートナー事業に採択され、事業開始が目前のように思われたが、国情の違いや、JICAとラオス政府との間に思惑の相違があり、事業開始まで実に、ほぼ1年を費やすことになった。その間、大使館の方々や現地JICA事務所の皆様の献身的なご協力により、2001年11月に、ようやくSomsonuk Settlementのハンセン病患者とその家族を対象に、歯科診療活動を開始することが出来た。

2002年12月まで、計5回に亘って歯科医師を派遣する一方、Setthathirath病院の歯科医師の協力を得て、月1回の定期的な歯科診療活動が行われている。まだ、2年目の事業であり、今後対象地を拡大した巡回歯科診療に医科のサービスを加え、更には年数回のフットケアーを併せて実施する計画である。



LAOS (2001)

ラオスへの寄贈品と寄付金額の配分

	2001	Total
Dental Equipment & Material	2,830,703	2,830,703
Payroll of staffs	179,187	179,187
Total		¥3,009,890

NGOとしての活動

最近、国の内外でボランティア活動をする日本人が増え、ある人がテレビで日本語にはボランティアにあたる適当な言葉が存在しないのではないかと発言されていたが、我々もその通りだと思っている。我々のグループは50年も前から奉仕団という言葉を使っており、その英訳もService Group となっている。馴染んでいるためか、この方が何となく自分のやっている事が理解しやすいように思われる。奉仕活動というものは自らの意志がどんなに高潔で崇高なものだと思っても、相手あってのことである。どんな立派な意志がそこに存在しても相手が「ノー」と言えばそこまでである。つまり何を相手が望んでいるかを見極め、相手の気持や、プライドを傷つけないような配慮が一番大切である。つまりその活動に気負い過ぎずに、自分の出来ることを継続して行う事に尽きると思っている。

我々の救ライ奉仕活動にしても約50年間にわたって継続してきた事に大きな意義があるように思われる。継続は「力」であると同時に、相手に対する奉仕だ援助だと思っていた事が、実はどれほど自分自身に教えられる事が多かったことか・・・。また自分といろいろな人や国との間にかけがえのない信頼や絆が生まれてくることも時間が教えてくれたのであった。

奉仕団創設者略歴

故 **梅本 芳夫**博士

● 略 歴

明治40年 6月25日	東京都赤坂区伝場町に生れる
昭和18年12月	大阪歯科医学専門学校教授（細菌学講座担当）
昭和24年 7月	大阪歯科大学教授（細菌学講座担当）
昭和46年 2月	岐阜歯科大学学長、学校法人岐阜歯科大学理事
昭和46年 4月	大阪歯科大学名誉教授
昭和56年 3月	岐阜歯科大学退職
昭和58年12月1日	逝去

● 受賞歴

昭和17年 8月	叙勲五等瑞宝章
昭和20年 7月	叙正七位
昭和53年11月3日	叙勲三等旭日中綬章
昭和58年12月1日	叙従四位

団受賞歴

● 団受賞歴

昭和49年	大韓民国大統領より冬柏賞
昭和50年	第27回保健文化賞
平成 2年	タイ保健省CDCより表彰
平成 4年	外務大臣表彰を受賞

梅本記念歯科奉仕団は
みなさまのご寄付をお待ちしています。

アジア各国から我々に寄せられる期待は大きく、私たちはそのすべてに資金的に応えることができません。
どうか皆様の暖かいご支援を梅本記念歯科奉仕団ではお待ちしています。
私達によせられた浄財は我々のアジアでの歯科診療奉仕活動にあてられると共に、
特別基金　梅本記念アジア歯科基金の基本財産にくみこまれます。

1950年から行ってきた街頭募金やチャリティー・コンサートの収益金をもとに、1979年11月7日外務省認可のもと日本初のアジア・コミュニティー・トラスト（基金型公益信託）が誕生し、その内に梅本記念救ライ基金（現在は梅本記念アジア歯科基金）を1983年6月に設立しました。

アジア・コミュニティー・トラスト（ACT）の特色は、運営委員会のもとで専門のスタッフが直接アジア各国に赴き、状況を確認直接援助を行う点にあります。また助成後も一定期間にわたってスタッフがプロジェクトの進行状況をモニターし、ご寄付いただいた皆様の善意が正しく効果的に使われているかどうかを確認しております。

寄付金及び賛助会費のご送金先は・・・　中央三井信託銀行 日本橋営業部

● 口座名 特別基金 梅本記念アジア歯科基金　● 口座番号 普通預金／8205621　● 郵便振替 口座番号／001-00-6-19755

タイ・ラオス・ベトナムでのプロジェクト

チェンライ

ソムサヌーク

コンケーン

クアカム

マハーサラカーム

バンモン

ローイエット

ウボンラーチャターニー

梅本記念歯科奉仕団事務局

本　部　〒230-0003 神奈川県横須賀市稲岡町82　神奈川歯科大学口腔細菌学教室　tel.0468-25-1500

大阪支局　〒589-0011 大阪府大阪狭山市半田1-672-6　田口歯科医院内　梅本記念歯科奉仕団　理事 田口 功　tel.072-366-2177